

# 古典から考える身体的性差とジェンダー

## —『とりかへばや物語』の異装と母性—

熊谷義隆

はじめに

本稿は、異装の物語として知られる『とりかへばや物語』の現代での受容と再生産の状況、そして文学としての研究を踏まえ、『とりかへばや物語』の作品を改めて見直すことを通して、その現代的意味を考えようとするものである。

『とりかへばや物語』の前半は、男性と女性がそれぞれ異装して生きる物語であり、そこに女性のあるがままに自由に生きたいという女性の願いを読み取ることができる。それが、現代でも青春小説や映画として再生産される要素であるといえる。一方、後半の本来の性に戻ってからの物語、そして作品全体をつらぬくものとして、家族愛や身体的性差、特に女性の懐妊・出産そして子どもの成長という要素も持つ。この母性と子どもの成長や父性という要素も、現代の男女平等・共同参画につながる要素を持つといえる。

### 一 『とりかへばや物語』の文学的評価の変遷

『とりかへばや物語』には元来の『古とりかへばや物語』と『今とりかへばや物語』があり、現存する『とりかへばや物語』が改作した『今とりかへばや物語』<sup>(注1)</sup>であることは、松尾聡氏らの研究によって明らかにされている。また、古本から今本への改作がどのようなものであったかについて小木喬氏らの研究がある<sup>(注2)</sup>。改作がどのように行われたかは大きな課題だが、本稿では現存する『とりかへばや物語』を考察の対象とし、以下『とりかへばや物語』として扱う。

古本はいつの時代にか散逸したが、その後現存する伝本は近世のものに限られる。刊本として発行されることがなかったことがこの作品の評価の現れとも考えられるが、近代においてこの作品の評価として決定的な役割をはたしたのは、藤岡作太郎氏の次の指摘であったことは確認しなければならない。

人情の微を穿てるところなく、同情の禁じ難きところなく、彼此人物の性格十分に發揮せず、ただ叙事を怪奇にして、前後応接に暇あらしめず、つとめて読者の心を欺騙（きへん）し、眩惑して、小説の功成れりとす。その奇変を好むや、ほとんど乱に近づき、醜穢（しゅうわい）読むに堪えざるところ少なからず。あえて道義をもって小説を律せんとするにあらず、その豪も美趣の存ぜざるを難ずるなり。ことに甚だしきは、中納言が右大将の妻の四の君と通じ、また右大将と契るところなど、ただ嘔吐を催すのみ。

明治三十年代の倫理観や価値観に基づく評価であることは間違いないが、この評価はその後もかなりの影響力を持ち続けたという。これに対し、鈴木弘道氏の研究などにより、文学的な再評価がなされてきた。その一つの到達点として、次の今井源衛氏の指摘をあげることができる。

この物語について、江戸時代には「奇書」と評し、明治の中ごろになると、藤岡作太郎が「醜穢読むに堪えざるところ少なからず」と評したことも有名であるが、その批評には、その時代の倫理思想もあずかるところが大きいとはいうものの、より根本的には、一貫してこの作品に対する誤解があったものというほかない。

（中略）

主人公兄妹の兄妹愛や、一徹者に見える右大臣の四の君に対する父親の愛情、左大臣の我が子に対する心痛のさまなどは、他の物語に比して、かなり目立つことである。ことに、兄妹が長期にわたって助け合ってゆくという筋立ては、他にあまり見ないもので、中世の曾我兄弟の例を思い浮かべさせるものがある。そして、こうしたささやかな家庭愛は、先に述べた性愛の質とその日常的な性格において、共通するものが多いといってよい。逆にいえば、先の性愛そのものも、外枠をはずせばけっしておどろおどろしいものではなく、『無名草子』の言葉でいえば、「にくからずをかし」いものといえる。

この物語の中心的な主題は、性の倒錯を契機として露呈される自然な愛の種々相であり、また、そうした数奇な運命をたどる女心の軌跡であったといえるであろう。

今井氏の指摘が、藤岡作太郎の評価を「誤解」として退け、鈴木弘道氏の指摘を受け、「中心的な主題」として「自然な愛の種々相」そして「数奇な運命をたどる女心の軌跡」にあるとする。変態・倒錯という醜悪な作品から、愛の種々相と女性の心理の軌跡を描いた作品として再評価されたと言えよう。

その女性の心理の軌跡をさらに深め、主体的な生き方を閉ざされた平安時代の女性の、自主的に判断し決断できる女性への憧れを読み取る評価が次になされてくる。

平安の物語は、さまざまに女の生き難さを語ってきた。『源氏物語』夕霧巻の「女ばかり身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」に始まる紫の上の述懐は、女であるという理由だけで、主体的な生き方を閉ざされた生涯を振り返っての訴えであった。

（中略）

他人に頼らず自ら判断し道を切り開こうとする女君には、新しい女の生き方の可能性への試みが感じられる。自分のあるがままに自由に生きてみたい。閉塞した状況の中で夢想された女の憧れが、『今とりかへばや』を誕生させたのではな

かろうか。<sup>(注6)</sup>

この石埜氏の指摘が、1970年代前後からのジェンダー論を視野に入れていることは間違いない。本来は女性でありながら男として生きた女君は本来の性である女性に戻っても、従来の女性像とは異なったあり方を示す。それを別稿で石埜氏は次のように指摘する。

『今とりかへばや』の女君は、男として生きた過去の経験で培われた自らの判断と責任において打開の道を選び取ってゆく。それはこれまでの物語の女君にはない強さであった。

『今とりかへばや』作者は、男と女の生活を経験させることによって、それまでの物語にない魅力的な女性を造型した。<sup>(注7)</sup>

このような石埜氏の指摘を踏まえつつ、「心強さ」の語に着目して王朝物語史の女性像を星山健氏が検討している。<sup>(注8)</sup>そこで氏は、『とりかへばや物語』以前の「心強き」女の系譜は女性の生きがたさの中で男性を拒否するものであり、それは、一夫多妻的な結婚制度や厳格な身分差、罪障深き者として宗教的な救済からも遠ざけられた女性の逡巡を描いた〈女の物語〉の流れと重なっている。しかし、『とりかへばや物語』の女君の、異装によって男性社会の体験をし主体的に生きる「心強き」生き方はそれと異なっており、従来の〈女の物語〉に幕を下ろしたと指摘する。

このように、異装を経験する女君の主体性を読み取りそれを評価するのが文学研究における現状と言えるであろう。さて、ここで注意しておきたいのは、『とりかへばや物語』への評価の視点が、やはり異装に集中している点である。書名が示すように、「男女を取り替えたい」というのが大きなモチーフになっているのは間違いない。しかし、後述するように、異装解除後の物語をどう評価するか、という点でまだ検討する余地が残されていると思われる。

## 二 近現代における受容と再生

文学研究における『とりかへばや物語』の再評価を見たが、異装について心理学からのアプローチがあり、また異装をテーマとする文学作品や映像が現代においても作られている。その現状も確認しておきたい。

心理学の方面から『とりかへばや物語』に着目したのは、河合隼雄氏であった。<sup>(注9)</sup>氏は「精神」と「身体」あるいは「男らしい」「女らしい」という二分法は便利で有効なものではあるが、人間存在としては随分と無理をしている方法であり、人間存在は二分法から抜け落ちる部分がある。その二分法を「かきまぜる」のに『とりかへばや物語』は役立ち、人間や世界を見る新しい視座を提供してくれるもの、と評価する。その上で二分法だけでは捉えきれない、二分割の境界に割り込む「第三の因子」として「たましい」の存在を考えることを提唱している。

筆者にこの指摘の当否を判断する力はないが、「男」「女」という二分法を相対化し、従来の見方を「かきまぜ」て改めて全体性を捉える視点は『とりかへばや物語』から学びうるのではないと思われる。

さて、『とりかへばや物語』は女君が男君に、男君が女君に入れ替わる異装の物語だが、「異性へと変身する物語」と「互いの立場を入れ替える物語」という二種類の

変身物語はあるが、この二つを組み合わせた「男女入れ替え物語」は世界的に見て類例が少ない。しかし、日本では継続的に作品が発表されているとして、『とりかへばや物語』から現代の作品までを白鳥公樹氏が論じている。<sup>(注10)</sup>氏を取り上げているのは、『とりかへばや物語』（平安時代）、「あべこべ玉」サトウハチロー『少女倶楽部』（1929年7月～1930年6月）、「おれがあいつであいつがおれで」山中恒『小6時代』（1979年4月～1980年4月）、映画「転校生」大林宣彦監督（1982年）、映画「君の名は。」新海誠監督（2016年）の五作品である。近現代の作品すべてが『とりかへばや物語』の影響とは断言できないだろうが、男女が入れ替わる異装の物語としてここで考察の対象とする意味は充分にあると思われる。

氏はそれぞれの作品の成立から構造・主題まで詳細に論じている。例えば『とりかへばや物語』については、最終的には身体に合わせた性で生きることが最良だとするが、男女入れ替えの異性体験を肯定する要素を含んでいる、と作品の二重性を指摘している。これは極めて妥当な見解と言えよう。一方、戦前の作品である「あべこべ玉」ならば、異性が持つ役割をうらやむことを否定し、個人が果たすべき社会的役割、性役割を履き違えてはならない、という内容になっていて、男女の性差を肯定するものであるという。「転校生」は「おれがあいつであいつがおれで」を基に、設定を小学生から中学生に変えて映画化したものである。「おれがあいつであいつがおれで」の作者山中恒は後に「男らしさ」「女らしさ」へのアンチテーゼとしてこの作品を執筆したと述べるが、作品は男性視点での女性の身体の魅力の表現になっていると捉える。同じく「転校生」も自分以外の人の性、あるいは異性の実情を知りたいという人間の好奇心に訴えかけ、女性の身体が持つ性が中心になっており、まなざされる対象としての女性を求める男性視点からの欲求が潜んでいる、と捉える。一方、「君の名は。」は、入れ替えに気楽さ、コミカルさを付与し、男女の性差表現への偏重を回避しているとして、入れ替えに伴う性への関心を薄めていると捉えている。「君の名は。」に見られるように、ユニセックス化が進む中で「男らしさ」「女らしさ」の二項対立は意味をなくす可能性も示唆している。これらを踏まえ、氏は「取り替えもの」の特性を次のようにまとめている。

現実には起こり得ない状況において描かれる男女の姿は、当時の社会状況や作者の意図を受けて様々な形で描かれる。そこに共通して含まれるのは、人間が異性という、自分とは異なる「他者」とどう関わっていくかという根本的な問いであり、それを非現実的な状況を設定することで表面化させることが「取り替えもの」の持つ特性なのである。<sup>(注11)</sup>

「取り替える」ことにより「他者」との関わりを問い直す、これは個々の作品の評価を越えた大事な視点であると思われる。

さて、白鳥氏が「取り替えもの」として対象とされた作品の主人公を考えてみよう。

「あべこべ玉」は中学生の男子と小学生の女子で、発表誌は『少女倶楽部』、「おれがあいつであいつがおれで」は小学生の男女で発表誌も『小6時代』。「転校生」はそれを中学生に変えていた。「君の名は。」は入れ替わりに時間のずれはあるが、女子高生が三年後の男子高校生と入れ替わる設定である。つまり、これらの作品は全て青少年が主人公である。これは、現代の異装・入れ替わりという設定が、思春期・青少年期の異性への関心と相関していることを示していると言える。

この傾向は、『とりかへばや物語』を基に少女小説として執筆された氷室冴子の

『ざ・ちえんじ』にも明確に見て取ることができる。この作品は1983年の1月に前編、2月に後編がコバルト文庫から刊行され、姉弟で入れ替わった性をどう取り戻すかをコミカルに描いている。視点は全て十代の姉稀羅のものであり、稀羅は男性として出仕しても男女の性に関する知識もなく、宰相中将との口づけで懐妊したと思ひ込み失踪して宇治川で芋洗いをする娘になっていたりする。全体の構想は、家出して嵯峨の山荘に行きそこで水浴びをしているところを帝に見られ、そして水晶を渡され、帝はその女性が弟の稀羅姫と思ひ込んでいるが、姉弟は入れ替わり、それが最後の帝との結婚へと発展する。入れ替わりや登場人物はある程度共通させているが、かなりの改変が加えられた作品である。

この『とりかへばや物語』の再生について、佐伯順子氏は次のように指摘している。

『とりかへばや物語』が前述のように、少女小説や少女漫画として現代にも再生しているのは、女性の幸せに対する価値観が、長い時を経て不動であることの表れと言えよう。特に、「少女」向けメディアの素材となっているのは、異性装というモチーフが『リボンの騎士』をはじめとする少女漫画の「伝統」に添うものであるとともに、闊達に生きたいという「少女」読者たちの願望が、男装によるトランスジェンダーの主人公の人気をいまだ支えているからであろう。しかも、「幸せな結婚」というオチがついていれば、女性読者の期待に応えるプロットとしては完璧と言える。異性装に体现される歴史を通じたジェンダーのありようを、『とりかへばや物語』は今日に伝える<sup>(注12)</sup>。

『ざ・ちえんじ』のような異装を扱った少女小説に、自由闊達に生きたいという少女の願望を見て取るが、それは『とりかへばや物語』の中にも見出されることであった。そして、異装をモチーフにした小説や映画の異装は、思春期の異性への関心と関わるものであった。

つまり、現代において異装は、思春期や青春期の若い年代の異性との関係を扱うものになっているのである。そこに『とりかへばや物語』の現代的意味を見出すことは出来るが、大きく異なっている点も見えてくる。白鳥氏が挙げた近現代の作品や『ざ・ちえんじ』では、異装はあっても懐妊・出産という要素がないことである。青少年期の異性への関心や憧れという視点からは、それは視野に入らないことであろう。しかし、『とりかへばや物語』では、それが大事な要素となっている。それについて、片岡麻美氏は次のように指摘する。

『とりかへばや物語』の女性たちは密通によって妊娠させられ、母となることで苦しみ続けるのだが、『ざ・ちえんじ』の女達は恋愛を経ることによって、自分の本来あるべき姿に目覚める。両者は本質的に「女性のあり方」が異なるのである。

(中略)

『とりかへばや物語』では主要な姫君は皆密通され妊娠するのだが、『ざ・ちえんじ』では三の姫以外の密通は皆削除されている。綺羅は宰相中将にキスされ妊娠していたと誤解する挿話があるが、実際は妊娠していない<sup>(注13)</sup>。

「母となることで苦しみ続ける」かどうかはともかく、『とりかへばや物語』において中心となる女性は懐妊・出産を経験する。まさに、女性のあり方が違うのである。それでは、この懐妊・出産やそれに伴う子どもとの関係がどのように描かれているのかに着目しながら次に検討したい。

## 三 『とりかへばや物語』再考（1）異装と家族

権大納言兼右大将は容貌・才能・世間の評価も優れているのに、人知れぬ悩みがあった、と物語は語り出す。母親の違う男君と女君がいたのだが、その性格や行動が本来の性と異なっているのである。そこで男君を女君に、女君を男君に「取りかへばや」と思っていたという。まずはその描写を確認しよう。参考までに、拙訳を施した。

若君は、あさましようもの恥ぢをのみし給ひて、女房などにだに少し御前遠きには見え給ふこともなく、父殿をも疎くはづかしくのみおぼして、やうやう御文習はし、さるべきことども教へ聞こえ給へど、おぼしもかけず。ただいとはづかしとのみおぼして、御帳の内にのみ埋もれ入りつつ、絵書き、雛遊び、貝覆ひなどし給ふ（一・28）

（若君は、あきれほど人見知りばかりして、女房などでさえ少し見慣れない人には姿を見せることもなく、父に対してまでうとましく恥ぢかしく思っており、（父大納言が）しだいに（男性に必要な）漢文や漢籍を学ばせ、男子としてのしかるべき事を教えようとしても、まったく思いもかけない。ただ、とても恥ぢかしく思っており、御几帳の中にばかり隠れていて、絵を描いたり、人形遊び、貝合わせなどを行っている）

男君は内気で恥ぢかしく、男性に必要な漢文の学習などにもさっぱり関心を払わない、という。それに対して女君は次のように描かれる。

姫君は、今よりいとさがなく、をさをさ内にもものし給はず。外にのみつとおはして、若き男ども・童などと、鞠・小弓などをのみもてあそび給ふ。御出居にも人々参りて、文作り、笛吹き、歌謡ひなどするにも、走り出で給ひて、もろともに、人も教へ聞こえぬ琴・笛の音も、いみじう吹きたて引き鳴らし給ふ。（一・28）

（姫君は、今からとてもいたずらで、ほとんど家の中にはいない。外にばかりずっといて、若い男や童たちと、蹴鞠や小弓などばかりして遊んでいる。客として人々が参上して、漢詩を作り、笛を吹き、和歌を朗詠したりする時にも、走り出て来て、一緒に、誰も教えない琴や笛を上手に吹いたり鳴らしたりする）

女君は外交的で活動的、そして教えもしないのに漢詩を作ったりしている。このような状態なので、男君は姫君として、女君は男君として育てられていく。男の子らしい、女の子らしいという社会的性差が身体的性差を凌いでしまうのである。

このような二人だが、母親は違うのに顔立ちは「ただ同じものとのみ見え」と、瓜二つであったという。もちろん、将来の入れ替わりの伏線と捉えるべきだが、母親の存在に注意を払いたい。男君の母は源宰相の娘、女君の母は藤中納言の娘と紹介されている。父の権大納言はこの二人の容姿があまり美しくないのに不満を持ち、満足する妻がないことに内心不満だという。それでも同じ屋敷に住ませ、それぞれ一か月に15日ずつ通っている。源氏物語の夕霧を思わせる生真面目さだが、そうしているのは、生まれた子どもたちが優れていたからであった。男君と女君が出仕した女君十七歳の新年に、父は二人に向かって、自邸にいた時は母親同士のいどみ心のために兄妹は親しくできなかつたが、二人しかいない兄妹なのだから、性を入れ替えていることも互いに相談しながら過ごすように、と諭している。これも入れ替わりの伏線なのだが、このように男君女君のことを心配し、いろいろ配慮するのは父だけであり、

母親はほとんど関わっていない。つまり、それぞれの母親を紹介しながら、母親の役割を果たしていない。母性は切り捨てられているのである。これは、異装を解除した後の物語で、女君が母性を発揮することとの対照を意識したものと考えられる。そして、心配する父と異装の男君、女君の物語として展開していくのである。

さて、女君十二歳の年、男君は女性の成人式にあたる裳着を行い、女君は男性の成人式である元服を行い、そのまま侍従として出仕することになる。その状態を次のように描いている。

その秋の司召に、侍従になり給ひぬ。帝・東宮をはじめ奉りて、天の下の男・女、この君を一目も見聞こえては、飽く世なく、いみじきものに思ふべかめり。（中略）琴・笛の音にも、作り出づる文の方にも、歌の道にも、はかなく引き渡す筆のあやつりまで、世に類なくうちふるまひ、交じらひ給へるさまのうつくしき、容貌はさるものにて、今よりあるべきさまにむべむべしく、世の有様・公事を悟り知りたることのさかしく、すべて事ごとにこの世のものにもあらぬを、

（中略）

この君、なほ幼き限りは、わが身のいかなるなどもたどられず、「かかる類もあるにこそは」と心をやりて、わが心のままにもてなしふるまひ過ぐしつるを、やうやう人の有様を見聞き知りては、物思ひ知らるるままには、いとあやしくあさましう思ひ知られ行けど、さりとして今は改め思ひ返しても、すべきやうもなければ、「などてめづらかに、人に違ひける身にか」と、うち独りごたれつつ、もの嘆かしき（一・50）

（その秋の司召に、侍従になった。帝・皇太子をはじめ、天下の男女は誰でも、この若君を一目でも見ると、忘れられず素晴らしい人と思うようである。（中略）琴・笛などの音楽でも、漢文を書く漢学の素養も、和歌でも、ちょっと書き流す筆使いまでも、類ないほど優雅にふるまい、出仕している愛らしさは、容貌は言うまでもなく、今から理想的でなるほどとうなずける様子で、世間の常識や朝廷の儀式にも通じていて賢明で、すべて何事にもこの世にないほどすぐれすぎている、

（中略）

この若君は、やはり幼い頃は、自分がどうであるかなど考えもせず、「こういう人もいるのだろう」と思い込んで、自分の心のままにふるまって過ごして来たが、だんだん、人の様子などを見たり聞いたりして知ってきて、物を思い知るにつれ、自分のありようをととても奇妙であきれることだと思い知ってきたが、そうかといって今更考え直しても、どうしようもないので、「どうして奇妙に、他の人と違ってしまった我が身なのか」と独り言を言いつつ、物嘆かしい）

男性として出仕した女君は、芸能や書道はもとより男性としての仕事も見事にこなし、世の賞賛を浴びるといふ。物語的な賞賛とも取れるが、女性であっても男性の仕事を経験することが出来るという女性の側の主張も見て取れそうである。一方、女君の内面では、幼い頃はともあれ、世に出たことによって自分の異装の異常さに気づき嘆いている、という。本来の性への回帰をこの時から願望していると読めるが、社会的な賞賛と内面の苦悩というあり方は『源氏物語』の薫とよく似ている。それを重ねると、悩みながらも男性の仕事を経験する女君を、薫のような理想的な男性像と捉えていると読み取ることも出来るだろう。ともあれ、女として尚侍になった男君が、異装

に悩むことなく女春宮と過ごすのと対照的である。

さて、女君16歳から21歳までがこの物語の中心になる。女君の同性の女性との結婚、そして自身の懐妊・出産から異装の解除、そして男君と入れ替わりそれぞれ幸福と栄華を手にすることになる。この異装を、物語は父大臣の前世からの因縁である天狗の所業と説明し、その天狗の力も衰えたことで異装を解除することができた、と説明する。天狗の所業という超自然的な要素を用いて大きく枠取りしているのである。そして、幸福と栄華も、吉野の宮の予言することでもあった。このような大きな枠取りを設定している。しかし、その具体的な展開が、多くの懐妊と出産によってなされることに注意したい。

#### 四 『とりかへばや物語』再考（2）懐妊・出産と母性

女君は16歳の時、同性である右大臣の娘四の君と結婚する。また、男君は尚侍として女東宮の許へ出仕する。女君17歳の時、四の君と女君の友人でもある宰相中將が密通し、四の君は懐妊する。この懐妊を契機に、女君は出家を考え、吉野の宮を訪れる。この吉野の宮の存在と吉野の地が、異装解除の重要な要素となる。さて、翌年の18歳の初秋、宰相中將は中納言として男装しているが実は女性であることを見破り男女関係を結び、女君は懐妊する。そして19歳で女君は右大将に昇進するが、宰相中將のゆかりの所領のある宇治へ身を隠し、異装を解いて女性の姿に戻る。この時、四の君も宰相中將の子を身籠り懐妊している。宰相中將は京にいる四の君の許にも行き、宇治の女君の許を行き来する。この宰相中將の所業に、女君は不満と嫌悪を感じ、出産したら宇治へ逃避して出家をと考える。

一方、女君である右大将が失踪したため、尚侍として出仕していた男君は女装を解き、男性の姿に戻って女君を探そうと決意する。この時、尚侍として仕えていた女東宮も懐妊していた。実は男君は女性として出仕していたのだが、女君16歳の時に仕出してから、女東宮とは男女関係があった。その結果としての女東宮の懐妊を、異装を解く時期に重ねている。ともあれ男君は、女君が通っていたという吉野の地に赴き滞在し、出産を終えた女君からの吉野の宮への文から女君の所在を知り、女君を宇治から吉野へと連れ、兄妹の再会になる。

そこで男君は、女君が自分の代わりに尚侍になりすませば女東宮の懐妊・出産の秘密も守れるし、女東宮との連絡も取れるだろうと考え、これまでの男君の尚侍を女君が、女君の右大将を男君が担う、つまり双方入れ替わることを提案し、それぞれが異装を解いて本来の性に戻るのである。そして女君20歳の時、尚侍として仕出した女君は帝と契り、男皇子を出産する。翌21歳にその男皇子は立坊し女君は女御へ、そして后へと栄華の道をたどる。

心理や歌などの表現を割愛した説明になったが、異装とその解除の物語が、天狗や予言という大枠を与えられながら、具体的展開は、多くの懐妊・出産を組み立てることで出来上がっているのである。

さて、女君は初めて産んだ我が子を残して宇治を抜け出す。それは、男性として生きて来たからの決断と本文は述べる。

「さは、これしばし」と抱き移させ給ふに、驚きてうち泣き給へるを見守りつ

つ、身を分けとどむる心地してゐざり出で給ふを。人は何よりも、子の道の闇は思ひ代へざるべきわざなるを、さこそいへ、男にて慣らひ給へりける名残の、心強さなりければなるべし。（三・198）

「それでは、この子をしばし」と若君を乳母に抱き抱えさせると、若君が目覚まして泣くのを見守りつつ、身を分けて残していくような気分で行く。人は何よりも子を思う道の闇に例えられる親の心は代えがたいものだが、そうはいつでも、男姿で慣れてきた名残の、気の強さがあるからだろう。）

目を覚まして泣く我が子を残していくのには身を割かれるような思いを感じ、藤原兼輔の歌を引用しつつ子を思う親の情を感じながら、男性として生きて来た「心強さ」を發揮して決断する。前引星山氏の着目する「心強さ」は、男性として社会体験をした成果であった。そして同じく前引石埜氏が指摘する<sup>(注14)</sup>ように、それまでの物語にない女性を描いている。男性として生きたことが、新しい道を切り開くことになるのである。

しかし、女君はこの子どものことを忘れることが出来ない。男性性によって運命を切り開きながら、子を思う気持ち、母性にとられるのである。その極点を、後日談とも言える女君29歳の物語として描いている。宇治で生まれた子は11歳になり、宰相中将（現大納言）の子として童殿上している。現在は中宮となった女君は、その我が子に次のように話しかける。

今少し近く居よりて髪などかき撫でて、「君の御母、さるべきゆかりある人なれば御事をいと忘れがたく恋ひ聞こゆめるを見るが心苦しければ、かく聞こえつるぞよ。大納言などは、今は世になき人ぞと知り給ふらむ。さこそありしか、とまねび給ふなよ。ただ御心一つに、さる人は世にあるものとおぼして、さるべからむ折はこのわたりに常に物し給へ。偲びて見せ聞こえむ」と語らひ給へば、いとあはれと思ひたる気色にてうちうなづきてみたるがいみじうつくしく、離れがたき心地せさせ給へど（四・236）

（中宮は、もう少し近くにひざをすすめて髪などを撫でて、「あなたの母は、私としかるべき縁のある人なので、あなたのことを忘れがたく恋しがっているらしいのを見るのが気の毒なので、このように話すのですよ。父の大納言などは、あなたの母を今はこの世にいない人と思っているでしょう。父にこういうことがありました、と話してはいけません。ただ、あなたのお心一つに、母はこの世に生きているものと思って、しかるべき時にはこのあたりにいつもお出でなさい。こっそり、見せましょう。」と話すと、とても嬉しいと思っている様子でうなづいているのがとてもかわいらしく、離れがたい思いがする。）

女君は、母にゆかりのある者と述べながら、自らが母親であることを示唆する。そして、現在は大納言である父には話さず若君一人の心の中にしまい込んでおくように、と述べる。鈴木弘道氏が「宇治の若君に対する母性愛の極致を物語るもの<sup>(注16)</sup>」と指摘する通りであろう。若君も、現在中宮である女君が自分の母であると理解し、しかも母との約束を守って父大納言には話さない。秘密は守られるのだが、女君の母性は感動的に描かれている。この母性は、現在内大臣になっている男君や中宮である女君の母親が母性を發揮することなく大きな役割を果たさないのと対照的である。森下純昭氏が「今『とりかへばや』の場合、前半に『父性愛』後半に『母性愛』を対照的に際立たせており、物語の構成原理として使用している感が強い。」と論じているが、<sup>(注17)</sup>

首肯すべき見解であろう。

さて、中宮である女君と若君の対面を、帝が垣間見していた。そして、中宮の最初の男性が大納言であったと了解する。しかし、その非を責めることはない。中宮が何人もの自分の皇子や皇女を産み、そして美しい女性として愛するからである。これも、中宮の父が二人の妻に不満を持ち続けてきたことと対照的である。そして、中宮の父と同様に、我が子を産んだ母である中宮を愛する。そこに、帝の父性愛を見ることができるだろう。帝の愛に包まれながら、女君は秘密を守りつつ母性を発揮する。

以上のように、『とりかへばや物語』は、異装という形で男性社会に生き、それを支えに自分の人生を切り開く。そして本来の性に戻り、身体的性差である懐妊・出産そして母性に生きつつ、帝との愛を受けながら中宮という社会的存在を持つことになった物語である。その女君に父は父性愛を發揮し、帝も父性愛を示す。つまり、異装とともに身体的性差そして母性と父性を含む物語なのである。

## 五 『とりかへばや物語』の現代的意味—母性・父性そして子の成長をどう活かすか

『とりかへばや物語』を、異装による社会進出と、身体的性差そして母性と父性を含む物語と捉えたが、現代は女性の社会進出が進んでいる時代である。そこで、この母性と父性そして子どもとの関わりは、現代の問題を考える上で示唆を与えてくれると思われる。もとより国文学プロパーの筆者の管見の限りであるが、いささか考察を行いたい。

女君が本来の性に戻り、懐妊・出産をして母性を発揮する。この物語から、身体的性差＝母性＝女性の本能という図式を読み取りたくなる。平安時代の女性の役割から見ても、それは妥当なように感じられる。しかし、母性が女性の本能であり本来の役割であると捉えるのは、現代においては妥当性を欠くであろう。例えば精神科医の香山リカ氏は、人生の目的は自分が自分らしく生きる「自己実現」が究極のゴールであり、母となることを選ばなかった女性にもその自己実現があることを論じている<sup>(注18)</sup>。仕事に集中して妊娠をしなかったり、積極的に子どもを持たない人生の選択も当然ありうるわけであり、妥当な見解というべきだろう。

現代だけではない、前引石埜氏<sup>(注19)</sup>が異装をする女君に『源氏物語』の紫の上の述懐と同質のものを見出したように、『とりかへばや物語』は明らかに『源氏物語』の影響を受けている。その『源氏物語』は、子どもの存在に非常に意識的である。長編構造自体が、光源氏の子供を産む藤壺と明石君そして子どもを産まない紫の上によって構成されている<sup>(注20)</sup>。そして大事なことは、ヒロインである紫の上に子どもがいない点である。子どもを設定せず、光源氏と最愛の女性である紫の上との、精神的な愛情だけの関係が可能なのか、このような主題を持つ物語と捉えることが出来る。子どもを多く産むことが物語の女主人公の幸せの基本のように考えられた時代にあって、『源氏物語』はそれとは異質な設定をしているのである。ましてや現代において、女性すべてに母性を求めることなどあってはならないことと言える。

また、この母性が戦前において戦争遂行に利用されたということは確認しておかなければならないだろう。永原和子氏は国家が期待した「賢母」の原型は、我が子のた

めに献身的につくしながら、一方でその子を「公」に捧げることによって、母が社会の公の領域に参加していくことと指摘している<sup>(注21)</sup>。そして戦争の遂行とともに、子どもを兵士のための人的資源確保に母性が活用されることになる。また、永原氏は、国家からの母性への働きかけに、女性解放を主張した高群逸枝などが戦争反対から戦争協力へ屈折した論理を検討する必要があるとする。

その批判の対象として、1918年から翌年にかけて与謝野晶子と母性保護論争を展開した平塚らいてうも含まれるのだろう。

しかし、平塚らいてうは、子どもを死に追いやる戦争に対し、母性を尊重する立場から否定的であったという。平塚らいてうへの批判を含め、らいてうの反戦と平和へのあり方を鈴木直子氏が検証し論じている。そこで氏は、平塚らいてうの女性と平和の結びつきは、生命を育む母である女性が人間を殺しあう戦争を憎むのは当然、という本質主義的母性観に支えられているとし、戦後の母親運動にも見られる「女性」「子ども」「平和」を三位一体のようにして考えるのは戦前から、母性保護論争の頃から一貫している、と捉えている。母性と子どものあり方が、平和という課題と関わっていたのである。

そもそも、母性保護論争での平塚らいてうの主張に、子どもとの関わりがあったことも指摘されている。母性保護論争は、女性の経済的自立こそ男女平等の条件とする  
与謝野晶子に対し、母性への国家的な支援を求め育児の重要性を主張する平塚らいてうの論争に、山川菊栄が参与して婦人解放と社会主義の関連を指摘したものと捉えられている。この母性保護論争について、米田佐代子氏は、らいてうの母性保護論争の核心は、母性の担い手である女性の権利を、母性の対象である子どもの権利として捉えたところだと指摘する。そして、その現代的な意義として、次の国連決議にその達成を見るようである<sup>(注23)</sup>。

（平和と子どもを軸とする母性主義は）一九七九年十二月の国連総会で採択された『女子に対するあらゆる形態の差別撤廃条約』が、あらゆる貧困と民族的差別と戦争の脅威の廃絶こそが男女平等の前提だとし、また特に家庭責任における男女平等をうたった条項で、「あらゆる場合に児童の利益は優先的に考慮される」と規定したことによって、今日国際的にも確認されたのではないだろうか。らいてうの、「子どもの権利」認識を土台にした「子ども本位主義」ともいうべき母性主義は、今日からふりかえるならば、右のような意義を持つものといえるのである。

男女平等の前提として、貧困と民族差別そして戦争の脅威の廃絶、家庭責任における男女平等と児童の利益の優先があげられている。母性に基づく平塚らいてうの眼差しはこのような広い視野を持つものだったのであろう。これらは現代に生きる私たちに求められていることと言ってよいだろう。

さらに、この条約と1981年採択のILO「家庭責任をもつ男女労働者の機会均等、平等待遇」についての条約と勧告を取り上げ、伊藤康子氏は、それを達成するためには「男女双方の伝統的な役割の見直し」が必要であり男女の共同責任のためにも「男性の役割の変革」が必要である、と述べる<sup>(注24)</sup>。

以上、現代における母性について瞥見してみた。母性が女性すべてに強要される「本能」ではなくあくまでも選ばれるものであり、それが国家的・社会的に求められる時の危険性には常に注意しなければならないだろう。その上で、母性は差別や貧

困・戦争と対立するものであり、男女平等だけでなく子どもの権利とも関連するものであった。これらはジェンダー論の立場からの指摘だが、これは女性論の問題ではないであろう。男性にとっても差別や貧困・戦争はあってはならないことであり、子どもの権利尊重や男女平等は男性の側の関わりがあってはじめて達成されるものであろう。「男女の伝統的な役割の見直し」や「男性の役割の変革」が求められるゆえんであろう。

母性に着目して、それが一方で持つ男女の伝統的な役割の見直しや、男性の側の変革という現代的な意味を確認してみた。さて、これはどの程度現実化し、社会化しているであろうか。1999年に公布された「男女共同参画社会基本法」では、男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ共に責任を担うことが第2条に定められ、それを基に様々な活動が実施されている。

一方で、この基本法の作成に大きな役割を果たした大沢真理氏に対し、その考え方の根底には男女の性に規定されることのない個人＝シングルの思想があり、「男と同等を強調するあまり、妊娠、出産、育児への配慮がなさすぎ、シングル肯定かエリート女性の話なのである」という山下悦子氏の批判がある。この批判の当否を判断する力は筆者にはないが、母性との関わりで男女平等を考えて来た場合、身体的性差である懐妊・出産・育児への理解と尊重があつて、その上に男女平等というものがあり得ると考えるのが妥当ではあるまいか。女性の社会的進出には、同時に男性の家庭進出が必要なはずであり、懐妊・出産・育児に関しては、男性の父性が求められるはずである。

このような中、少子化への対策も含め、女性が社会で働きながら育児も可能な社会を目指すため、天野妙氏や小室淑恵氏などが男性育休の普及・促進をすすめ、男性の育休義務化の法制化も提唱している。啓蒙活動にとどまらず、法制化するというのは大きな変化を招くことになるだろう。両氏とも育児と仕事を両立させており、その経験に基づいた男女のあり方には共感させられるものがある。

だが、同書でも男性への啓発の必要性を指摘しているが、法制化しても意識の変化がなければ成果は上がらないだろう。そして、法制化は一步間違つと、女性も含めた労働力を確保することで税と社会保障費を確保することが目的となり、男女共に自己実現を果たしていくという本来のあり方から逸脱する可能性もないわけではない。

いわば、前引伊藤氏が指摘する「男女双方の伝統的な役割と見直し」が必要であり男女の共同責任のためにも「男性の役割の変革」が必要なのであり、そこに意識改革が大事な要素を持つと考えられる。そこに、文学の側からのアプローチもあるのではないかとと思われる。

そこで、『とりかへばや物語』が持つ様々な要素が活用できるのではないか。例えば従来の男女の役割の見直しは、河合隼雄氏が指摘する従来の考え方の「かきませ」が有効であろう。そして、男女の相互理解に、小泉氏が指摘する異装に見られた想像力による他者理解も有効であろう。立場を「取り替え」ることによる相互理解である。そこから、身体的性差を踏まえながら相互に尊重・理解して達成する自己実現、ないし新しい父性・母性への道が開かれるのではなかろうか。これは文学の領域を超えることではあるが、文学の社会的効用の可能性として考えられることではないかと思われる。

注

- (1) 松尾聡「とりかへばや物語」『平安時代物語研究』（1955. 6、東寶書房）
- (2) 小木喬「古とりかへばや物語の復原」『平安文学研究』第四七輯（1971. 6）  
及び同第四八輯（1972. 6）、後『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（1973. 2、笠間書院）に所収。
- (3) 藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇』（明治三八・1905）なお、本文の引用は、講談社学術文庫判により、一部読みをカッコ内に補った。
- (4) 鈴木弘道『平安末期物語研究』（1979. 12、大学堂書店）他
- (5) 今井源衛 鑑賞日本古典文学『堤中納言・とりかへばや物語』解題（1976、角川書店）
- (6) 石埜敬子 新編日本古典文学全集『とりかへばや物語・住吉物語』（2002. 4、小学館）解説
- (7) 石埜敬子「『今とりかへばや』—偽装の検討と物語史への定位の試み—」『国語と国文学』平成十七年（2005）五月
- (8) 星山健「王朝物語史上における『今とりかへばや』—「心強き」女君の系譜、そして〈女の物語〉の終焉」『国語と国文学』平成十八年（2006）四月、後『王朝物語史論』（2008. 12、笠間書院）所収
- (9) 河合隼雄『とりかへばや、男と女』（1991. 1、新潮社）
- (10) 白鳥公樹「日本文学における〈取り替えもの〉の物語構造—「とりかへばや物語」から「転校生」「君の名は。」まで—」『富大比較文学』第二期 第1（2018. 3）
- (11) 注10に同じ
- (12) 佐伯順子『「女装と男装」の文化史』（2009. 10、講談社）
- (13) 片岡麻美「「紫のゆかり」と氷室冴子—『ざ・ちえんじ』に見る古典受容の—様相—」（『埼玉大学研究と資料』2002. 7）
- (14) 注8に同じ
- (15) 注6. 7に同じ
- (16) 注4に同じ
- (17) 森下純昭「「とりかへばや」の主人公と主題—作中歌・引歌と「夜の寝覚め」との関係から—」『岐阜大学国語国文学』18巻（1987）
- (18) 香山リカ『ノンママという生き方～子のない女はダメですか』（2016. 7、幻冬社）
- (19) 注6に同じ
- (20) 拙著『源氏物語二つのゆかり—継承と主題の変化』（2009. 3、新典社新書）
- (21) 永原和子「女性統合と母性—国家が期待する母親像」（脇田晴子編『母性を問う（下）』1985. 12、人文書院）
- (22) 鈴木直子「平塚らいてうの反戦平和—女性は平和主義者か？」『青山学院女子短期大学総合文化研究年報』15（2007. 12）
- (23) 米田佐代子『平塚らいてう—近代日本のデモクラシーとジェンダー』（2002. 2、吉川弘文館）
- (24) 伊藤康子「戦後改革と母性—理念的民主主義と生活的民主主義」（脇田晴子

編『母性を問う（下）』1985.12、人文書院）

(25) 山下悦子『女を幸せにしない「男女共同参画社会」』（2006.7、洋泉社）

(26) 小室淑恵・天野妙『男性の育休 家族・企業・経済はこう変わる』（2020.9、PHP新書）

\* 『とりかへばや物語』本文は、桑原博史全訳注の講談社学術文庫により、漢数字で巻を、算用数字でページ数を示した。

(附記) 本稿は、2020年10月3日に行われた、山形市男女共同参画センター(ファーラ)主催の男女共同参画宣言都市記念講座での講演を基にしている。企画・運営に当たられたセンターの皆様、そして講座にご参加いただいた受講者の皆様に感謝申し上げます。